

佐古田好一の学校づくり実践における「子ども理解」の位置づけ

富樫千紘 *TOGASHI Chihiro*

—はじめに

- 1 — 佐古田好一の学校づくり論の構造
 - 2 — 佐古田が関わった1950年代の教育実践の検討
 - 3 — 佐古田学校づくり論の特質：「親・地域」の位置づけと取り組みの特徴
- おわりに

【要旨】地域の連携の場面においてどのような特徴がみられるのか明らかにすることを課題とし、佐古田好一の1950年代の学校づくり論及び教育実践に着目して検討を行った。検討を通じて、次の三点を明らかにした。第一に、佐古田の学校づくり論では、子ども・親・地域の実態把握を土台として学校づくりを進めていく、という構造をとっていたこと、第二に、当時の佐古田の実践における親・地域との連携の活動では「子どもの作品」が中心に置かれていたこと、第三に、佐古田の学校づくり論や実践における教師・親・地域の連携の活動が必要とされた理由として、①子どもの実態把握、②子どもを育てる上での「共通の願い」を教師・親が持つこと、が挙げられていたこと、である。

—はじめに

子どもを取り巻く課題の多様化・複雑化の中で、子どもの姿や生活をどうとらえるのか、学校における「子ども理解」の重要性が改めて問われている。学校現場においては、子ども・学校関係者を対象とした各種アンケートや学校評価を含め、「子ども理解」の仕組みがさまざまな形で取り入れられてきている。また、「チーム学校」をはじめとして、教職員以外の専門家が関わるようになっており、「子ども理解」を教職員のみで行うのではなく、複数の専門家・教育関係者によって行うことが求められるようになってきている。こうした状況において、子ども・教職員・保護者・地域住民、そして教育関係者の「子ども理解」をどのように集め、分析し、学校教育につなげていくのかが問われているように思われる。すなわち、「子ども理解」とは、その情報を集めるだけでは不十分であり、教職員や学校関係者で共有・分析し、教育活動と結びつけるまでを含み込んだ「子ども理解の枠組み」として位置づけられる必要があるといえる。換言すれば、「子ども理解」を学校経営の課題として位置づけることが求められているととらえることができる¹⁾。

以上の状況において本研究が着目するのは、戦後日本の「学校づくり」実践である。「学校づくり」とは、戦後日本の教職員組合運動や民間教育研究運動、およびそれらの教育実践の中から1950年代に用いられるようになった言葉である。「学校づくり」という言葉を用いた実践（以下、学校づくり実践）の意味内容を確認していくと、それらが生活綴方教育運動の影響を受けており、生活綴方による「子ども理解」と、それに基づいた学校・家庭・地域の連携の取り組みが行われていたことがわかる。学校づくり実践において、「子ども理解」がどのように位置づいていたのか、その構造を明らかにすることは、今日において重要な課題であると考えられる。

以上のことから本論文では、学校づくり実践における「子ども理解」の位置づけについて、とりわけ学校・家庭・地域の連携において、どのような特徴がみられるのかを明らかにすることを課題とし、佐古田好一の1950年代の学校づくり論及び教育実践に着目して検討を行うこととする。佐古田は、1958年に出版された遠藤五郎他編著『新しい学校づくり』（牧書店）をはじめ、「学校づくり」に関する本の執筆に携わった人物である。また、「学校づくり」という言葉が用いられた民間教育運動や地域教育サークル活動にも携わっている。とりわけ、佐古田の関わった教育実践においては、「親・地域」との連携の取り組みに力点が置かれているように見受けられること、50年代の佐古田の図書の多くが、「親・地域」との連携に関するものであることから、「親・地域」の連携が佐古田の教育実践の中で位置づいていたのかを確かめながら、実践を見ていくこととする。

1 —— 佐古田好一の学校づくり論の構造

(1) 1950年代の学校づくり実践の特徴

まず、1950年代の学校づくり実践の特徴として、次の三点を挙げることができる。第一に、学校づくり実践における教育活動が子どもの実態把握から始められていること、第二に、第一の点の理由から、学校づくり実践は学校と家庭・地域との「結びつき」をも含むものであり、その「結びつき」においても「子ども理解」が中心に置かれていたこと、第三に、実践のベースとなる教育研究活動においても、「子どもの声や生活が共有」され、その読み取りや理解をどう実践につなげていくかが教育関係者によって検討されていたことである²⁾。このように、戦後の学校づくり実践においては、子ども理解が学校の教育実践の中心に据えられており、子ども理解という取り組みそれ自体が学校の教育活動の中にも含み込まれていたのであった。

50年代の学校づくり実践がこうした特徴を持った背景としては、当時の時代状況がある。1950年代は民間教育運動の萌芽期であり、全国規模の教育研究団体が発足すると同時に、各地で地域教育サークルが結成された時期であった。50年代当時の民間教育運動の中心を担ったのは、生活綴方であり、当時の学校づくり実践も、生活綴方の実践家たちが担っていた側面がある。こうして、学校づくり実践の多くが生活綴方の影響を受けていた。

そして、当時の学校づくり実践は、学級・学年・学校単位、あるいは教職員の実践記録など、文集・記録活動に取り組んでいた。それらの文集や記録が、子ども同士、教師同士、子ども・教師間、あるいは教師・父母・地域住民間の直接の交流あるいは学習活動の基盤となっていたのである。すなわち、文集・記録が「学校経営」の方針に結びついていき、その方針についての共有と学習が、学校を中心とした教育関係者で行われていた。こうした文集・記録や、それらをもととした活動は、「子ども理解」を据えた活動といえることができる³⁾。

(2) 佐古田の学校づくり論の特徴

次に、佐古田好一の学校づくり論の特徴について整理していく。佐古田が「学校づくり」や「学校経営」という言葉を用い始めるのは、1957年以降のことであるため、主な素材として、(1) 佐古田好一・師井恒男『学校経営 99の相談』(明治図書、1957年)、(2) 「私の学んだこと」(志波末吉・佐古田好一・後藤敏夫・師井恒男・前原忠吉『現場の校長学』明治図書、1957年)、(3) 「教員室の士気を阻むもの」『児童心理』1959年4月号、を用いる⁴⁾。

佐古田の学校づくり論の特徴として、以下の三点を挙げることができる。第一に、学校の教育活動の目標を定める際には、教師が子ども・家庭・地域の実態を「具体的につかみ、その中から、子ども・家庭・地域の課題を発見して設定していかなければならない」という点である⁵⁾。佐古田は、親の意見について、佐古田は「そのままの形で受けとるだけではじゅうぶんでない」、つまり、「親たちの願いの底には、重要な地域の課題がよこたわっている」と述べている⁶⁾。また、学校と親・地域が結びつく条件について、佐古田は「信頼される教師になり、信頼される学校づくりをすること」が、「根本的な条件」と述べている。その際、教師と親の意見が「くいちがう」からといって親を攻撃するのではなく、「相手の生活感情を尊重しながら、根気強く話し合いを続ける」ことが重要である、とする。そうすることで、「親たちが気軽に出入りのできる学校になる」と述べている⁷⁾。

第二に、学校の教職員一人ひとりが、「学校経営」に関わることである。その際、佐古田は教師一人ひとりの特徴を生かした役割分担をすると同時に、それぞれが創意工夫をしながら教育活動を行えるようにする必要があると考えていた⁸⁾。

第三に、以上の「学校経営」における校長の役割として、以下の二点を掲げていた。それは、①校長自身が子ども・家庭・地域の実態を把握すること、②個別教師の個性・特徴を理解し、教師間の実践交流や学び合いを尊重し、環境を整えること、である⁹⁾。

以上のことから、佐古田の学校づくり論においても、子ども・親・地域を知ることが土台になっていること、そしてつかんだ「実態」をもとに学校づくりを進めていく、という構造がとられていることがわかる。次章からは、こうした「学校づくり論」を構築するに至った、1950年代の佐古田の教育実践を検討していく。

2 ― 佐古田が関わった1950年代の教育実践の検討

(1) 大江町立有路小学校における教育実践の特徴

佐古田が1950年代はじめに校長として赴任した大江町立有路小学校（以下、有路小）での実践として、①部落懇談会、②母親文集「桑の実のお母さん」、③母親学級が挙げられる。

①部落懇談会

有路小における部落懇談会の取り組みは、多忙な親たちの実態を受け、教師が部落へ出るという発想から始められた。このことは、学校に来る一部の親たちだけでなく、すべての親と接するためにも必要なことだと考えられた。こうした中、職員協議会で計画が立てられ、部落懇談会として実施された¹⁰⁾。

部落懇談会のねらいとして、佐古田は以下の三点を挙げている。第一に、「親を知り、親と親しみ、親の率直な願いを知る」こと、第二に、「それを通じて地域を知り、地域の課題をとらえる」こと、第三に、「子どもや教育に関する親たちの認識を高め、手をつないで子どもを守り、伸ばし、太らせていく態勢をととのえる」ことである。これらのねらいは、同時に「親・地域」による学校理解の促進も含み込むものであった。佐古田は、子ども・教育の問題を考える際には家庭・地域の問題にも話は及ぶため、その中で教師と親が共に学習することにもなると考えていた¹¹⁾。

部落懇談会は部落の集会所で行われたため、学校での懇談会よりも親たちにとって気安く話すことができ、学校では聞けない話も挙げられるようになった¹²⁾。教師自身も子どもの暮らしを中心に、家庭・地域での困難や課題を知り、部落での「生活感情」を理解できるようになった¹³⁾。また、有路小学校では全職員で作文の指導に取り組んでおり、部落懇談会の集まりに子どもの作品を持っていく教師が多かった¹⁴⁾。このことは、学校における子どもの姿を「親・地域」に共有することにもなった。

このように、部落懇談会の取り組みは、教師にとっては「親・地域」の実情や課題を知る場に、親にとっては学校での子どもの姿を知る場になった。そこで共有された課題から、後述する母親文集等、新しい実践も生まれることとなった。

②母親文集「桑の実のお母さん」

有路小の母親文集「桑の実のお母さん」は、母親たちの文集である。全校での学級文集の取り組みや学校文集「桑の実」の家庭への回覧や、PTA総会での作文の重要性についての教師からの報告などの影響を受け、親たちの作文に対する関心が高まった側面もあった。とりわけ、全学級の担任が毎日子どもの日記を読み、生活の指導に取り組んでいることが親に好評であったこと、その中で自分たちも書きたいという親が出てきたという。当初は母親達の作文を学校文集に掲載する予定であったが、多く集まったため、学校文集と

は別に母親文集「桑の実のお母さん」として発行することになった¹⁵⁾。

『桑の実のおかあさん』第一号は、17名の母親たちの文章を集めた20頁の文集であった。後に、親たちの中から編集委員を出して発行するようになり、父親の参加も少しずつ見られるようになった¹⁶⁾。

ここには、部落懇談会や母親学級の取り組みについての作文も掲載されており、学校に対して親がどのように感じているかを知る機会にもなったと考えられる。例えば、部落懇談会についての親たちの作文では、多忙な時期はPTA総会には参加しにくい父母も各部落に教師が来てくれることで参加できること、家庭の様子などをうかがうことができること、学校の指導方針を知ることができること等、学校が考えていた部落懇談会の利点を理解しようとしてくれていることが記されると同時に、そうした利点を考えながらも現状では不十分な点もあるのではないか、という感想も出されていた¹⁷⁾。また、学校からの話を親が一方的に聞く場面が多く、親から教師達に話題を提出する必要もあったと感じること、そのためには自分の子どもだけでなく、近隣の子どもの様子を観察するなど親自身も勉強したいと考えたこと¹⁸⁾等が挙げられている。こうしたことから、部落懇談会を親たちがどのようにとらえているかだけでなく、親たち自身が部落懇談会を有意義なものとするために工夫しようとしていたことがうかがえよう。

③母親学級の取り組み

上記①②に代表される日常的な学校と家庭の話し合いの中で、子どもをよくするために自分たちも学ばなければならないとして、親たちが自主的に母親学級を開くようになった。そこでは、教科目の成績についての指摘に留まらず、幅広い視野を持って「物の見方、考え方を高めて行こう」と考えられていた。こうした親たちの学習活動は、子どもから親への信頼を強くすることにもなった¹⁹⁾。

最初につくられた母親学級(有路小学校下の五日市部落)は1951年にはじめられ、部落別懇談会がその母胎となっていた²⁰⁾。これは、子どもの教育について考える親も勉強をする必要があるのではないか、という部落懇談会でのひとりの母親の提案が契機となっている²¹⁾。学校は母親学級の運営に際して、母親学級の主体は母親であり、母親たちの自主的な運営となるような支援をしようと配慮した。最初の母親学級での学習は、〈子どもを知る〉というテーマから始められた。それ以降も母親たちは熱心に取り組み、多忙である稲刈りの時期に集まったこともあるほどであった²²⁾。

母親学級の進行は、初めに教師らから議論の糸口となる具体的な話題を提供して話し合う、という形をとった。効果的な資料となったのは、子どもの日記や作文だった²³⁾。母親の要求でつくられた会であるため、運営方法も懇談で決め、会の持ち方もただ話を聞いて帰るのではなく具体的な問題について議論することが中心に据えられた。また、忙しい生活の中でも参加したいと思える会にするため、活動を継続していくためには、会自体が楽しいものである必要があるとして、「おしゃべりの会」のような気楽さを持つものとしよう

という工夫がされていたという²⁴⁾。

母親学級での話し合いを通して、「子どもの問題は家庭の問題であり、家庭の問題は部落の問題につながり、部落や町の問題は広い社会の問題の中にある」ということが明らかになっていった。そして、「農村問題や、政治・経済に関係した問題」にも話題が及んでいった²⁵⁾。また、母親学級の活動を通して、母親同士の人間関係も構築されてゆき、同時に家庭内での母親の地位も少しずつ高まっていった²⁶⁾。

(2) 大江町における教育実践の地域的展開

①地域内の教師同士の学び合い—福天作文の会

地域内の教師同士の学び合いの場となった地域教育サークルとして、福天作文の会がある。これは、大江町を含めた福天地域（1950年代当時の加佐郡大江町、天田郡の夜久野町・三和町・福知山市の一带）の教師たちが集い、1952年に結成されたものであり、佐古田が会長を務めた。伊藤隆司によると、会員総数は72名（1955年12月現在）で、「大江町内のすべての小・中学校に会員がいた」という²⁷⁾。

1952年度には3回の研究会を行っており、地域・全国の作文教育研究集会に会員が参加するなどの研究活動が行われている²⁸⁾。また、福天作文の会機関誌『こくばん』には、各学校の教師たちの学級での実践記録及びそれに対する批評が掲載されている。実践の記録やその検討を通じて、実践にあらわれる子どもや「親・地域」の姿や課題をどう把握するのか、どのような教育方法で課題に接近するのか、その検討が会員間で行われていたと考えられる。

②大江町教育研究会

大江町の地域教育サークルとして、大江町教育研究会がある。大江町教育研究会は、大江町（1951年に大江山の麓の六カ町村が合併してできた町）の小・中・高九校の学校全教員で組織されている研究会で、1953年に結成された²⁹⁾。その経費年約20万円を大江町が負担しており³⁰⁾、「会の町民に対する直接の働きかけとしては、『大江教育』を全戸に配布して教育への理解と認識を高める一方、社会教育部を設け、公民館、青年団、婦人会と手を握って社会教育に乗り出してい」たという³¹⁾。大江町教育研究会の果たした役割として、伊藤隆司は、「行政の支援のもとに、綴方教育に関心を持つ教師ばかりでなく、より広範な教師を結ぶ組織を持ったことが大江町における教育運動の活性化につながった」と述べている³²⁾。大江町教育研究会は、学校教育と社会教育の提携の場としても機能しており、教師自身も社会教育の中心的な担い手となった。佐古田自身も後に公民館の本館主事となり、町民たちに自分自身の生活をみつめ、物の見方考え方を学ぶ学習会を行っている。

大江町教育研究会の取り組みとして、地域文集の編纂事業が挙げられる。1950年代には、『台風13号』（1953年発刊）、『大江町風土記第一部 米とかいこ』（1956年発刊）、『大江町風土記第二部 くらしと文化』（1958年発刊）といった地域文集が編纂されている。

『大江町風土記』は1954年度から計画・作成されたものである。各学校から選ばれた編集委員を中心に、町内の小中高校全9校の全教師と児童生徒・親が協力しておよそ6年の月日をかけて作成された³³⁾。この目的は、単なる郷土読本・郷土誌ではなく、「郷土の歴史と現実を直視して、新しく豊かな町を建設するための課題とその解決への道に眼を開かせよう」というものであった³⁴⁾。また、子ども・教師・親の調査・記述活動それ自体にも意義があると考えられており、さらに完成した文集を社会科で効果的に利用することも企図されていた。作成の過程では、子どもたちが庶民の生活を中心にした郷土の歴史や生産について親・祖父母に聞き取りを行い、作文にした。親たち自身の綴った文章も掲載された。佐古田は、こうした仕事も親と教師を結ぶ文化活動のひとつであると述べている³⁵⁾。

こうした地域文集づくりの取り組みは、子ども・教師・親の共同の調査・記述活動であり、それぞれが地域の実態を共同して把握する過程であったと言えよう。子ども理解の視点から考えると、教師にとっては子ども理解の土台となる地域理解であったこと、親・地域住民にとっても、自分たちの生活・地域を振り返る機会となったことが指摘できる。

3——佐古田学校づくり論の特質：「親・地域」の位置づけと取り組みの特徴

(1) 実践者としての教職員集団の力量形成と組織化

佐古田の教育実践においては、「親・地域」との連携の取り組みなど、具体的な教育実践を行う実践者としての教職員集団力量形成が最も重要なものとして位置づけられていた。

佐古田は、教育実践を進める上で、子ども一人ひとりの実態を「あるがままにとらえる」ことを中心に据える必要性を指摘している。そのためには「親・地域」の実態をとらえることが求められた。すなわち、子どもの実態を「時代・社会・地域の現実の中で」把握し、「その中に生きる子どもたちひとりびとりの真実の姿」を明らかにすることで、学校・教師の具体的な教育目標を構築する必要があると考えていた³⁶⁾。

そうしてつくられた教育目標を具体的な教育活動を通して実践するのは教職員集団であり、それゆえ佐古田は子どもを育てる上で「教師の指導力」が最も重要な条件であると述べる。そして、教師の研究活動においては、①子ども・地域の実態把握が基盤となること、②教師の力量形成は日々の教育活動自体であること、③そのためには日常的に教師同士が教室で起きたさまざまな出来事について報告・相談・議論し合う雰囲気をつくること、④子ども・親・教師間で学び合う雰囲気をつくる必要があること、が挙げられている³⁷⁾。また、子ども・地域の実態把握や教師相互の実践共有は、教職員集団の民主的な人間関係の構築に結びつくとも考えられていた³⁸⁾。他方、子どもに問題意識を育てるという教育目標の実現のためには教師自身が「問題を発見する目」を持っている必要があるとされ、その意味でも実践記録を用いた実践・問題交流が求められていた³⁹⁾。

以上のような人間関係構築及び研究活動の上に、学校運営組織体制が考えられている。佐古田は、学校教育目標を教師一人ひとりが共有し、個人の特徴を生かした役割分担をす

ることと共に、各教師・各学級が創意工夫をしながら教育活動を展開できる学校運営組織体制を構想しており、「学校経営は、校長一人でやるものでなく、地域の協力をうけて全職員で進めるもの」であるにとらえている⁴⁰⁾。

(2)「親・地域」との連携の必要性

教師と親の連携が学校で求められる理由として、佐古田は、第一に、子どもの実態をとらえるために必要であること、第二に、子ども一人ひとりを育てていくために親と教師が「共通の願い」を有することが必要であること、を挙げる。佐古田は、学校は「家庭や社会の矛盾の中に生きている子どもたちを抑圧から解放して、不合理に対する抵抗力を育てる」場所であるが、学校と家庭・地域が対立すると子どもたちはその板ばさみになってしまうことを指摘する。実際に、教師と「親・地域」との協力体制の形成を両者の「意識のズレ」が妨げており、多くの交流の機会を設けて具体的な問題について話し合い、「意識のズレ」を少しずつ縮めることが必要である、と述べる。それゆえ、教師は子どもを理解し指導する中で、その原因を家庭や社会の実態の中で把握する必要があるにとらえている。このことは同時に「教師と親との仲間づくり」も要求している。すなわち、教師と親が共に子どもの実態をとらえ、生活指導上のさまざまな問題を共に話し合うことで、家庭・社会の矛盾はすぐに解決されずとも、子どもの成長と幸福に対する「共通の願い」を有することができると考えていた⁴¹⁾。

以上の「親・地域」との連携の取り組みは、子ども・地域の実態に基づいた教職員集団の組織化及び力量形成を促進するものでもあった。たとえば佐古田は、学校と「親・地域」が連携する上では全職員の歩調がそろっていることが必要であるとした上で、そのために家庭訪問や懇談会の後に全教職員で報告・交流をすることの必要性を指摘する。また、親たちに、子どもの課題や学校の教育活動の意味の理解を求め共有する際には、子どもの実態として現われた事実から理解してもらうことが第一である、と述べる⁴²⁾。このことから、「親・地域」との連携の取り組みが、教職員集団内の子ども・地域の実態共有を促進させるものでもあったととらえられる。

(3)「書くこと」と「読み合うこと」の意義

以上の取り組みや佐古田の学校づくり論において、「子どもの作品」、「書くこと」、そして「読み合うこと」が、重要な役割を果たしていることが確認できる。

佐古田は、教職員集団の形成や研究活動において、教師一人ひとりの実践記録をもとに議論することに大きな効果があるにとらえていた⁴³⁾。さらに、「親・地域」との連携の場面においても、子どもが書いたものをもとに話し合うことや、学級文集・学校文集などをもとに話し合うことを重要視していた。また、親たちの成長のために学習会の中で作文に取り組むことが有効であるとされていた⁴⁴⁾。

佐古田は、親と教師の話し合いの場で子どもの作品が重要となる理由について、次のよ

うに述べている⁴⁵⁾。

- (1) 子どもたちの本気な発言は、私たちの心をゆすぶる真実をもっている。
- (2) 子どもの作品を使えば、いやでも、話は身近で具体的なものになる。
- (3) 子どもの作品は、子どもを知り、あるいは知る手がかりを得るためには、なくてはならないものである。それによって、子どもに学ぶという姿勢ができてくる。子どもの人権尊重は、そこからはじまる。
- (4) 既成の概念にとらわれることなく、身のまわりの現実から学ぶことの大切さがわかってくる。つまり、大人の概念くだけである。
- (5) 書くことの大切さ—書くことは考えることであり、人間と人間とを結びつけることであり、生活の開拓に大きく役立つものだということも理解される。これは、教育そのものへの認識を高めることでもある。
- (6) 教師は作文によって子どもを知る。親も、また、作文を読み、話し合うことによって子どもへの理解を深める。教師と親とが、作文をめぐる話し合う中で、親は、教師の仕事やその意図することを理解し、教師は、親の気持や願いを知る。知ることは愛することだ。その中で、親と教師は結び合うことになる。

ここからは、「子どもの作品」の重要性として、子どもを知り、そして子どもから学び、教師や親自身の考え方を育てていくこと、そして、親と教師が互いの願いや意図を知り合うことが、挙げられていることが確認できる。また、佐古田は、子どもの作品から「子どもを知る」ことについて、次のようにも述べており、教師や親の子ども理解を崩していくことについても述べている⁴⁶⁾。

子どもの心にやどる、さまざまなよろこびや悲しみ、疑問や狭義、愛情や憎悪に触れていくうちに、「童心は夢のようだ。」などと考えるのは、大人の甘い干渉にすぎないこともわかってくる。親たちの胸にせまる真実の叫びや訴えに耳を傾けておれば、「子どものくせに」などと考えてきた、今までの大人たち自身のことを、「はてな」とふりかえてみて、「負うた子に教えられた」気持になる。

また、実際に、親が「書くこと」の意義について、佐古田は次のように述べている⁴⁷⁾。

子どもの作文を読んで話し合うだけでなく、自分でもこういう文を書いてみることから、子どもを見る目にも新しい角度と深さが加わってくる。見つめ考えるということは、理解を深めることにもなる。だから子どもの教えられるという気持も—そう強くなってくる。小さな喜びも、これを大事にしたいという思いもつもの。ほんものの愛情の、新しい息吹だといってもよい。このような親たちのかわりかたは、子どもの

幸福につながっている。

ここでは、「子どもの作品」の重要性でも書かれていたように、「書くことは考えること」という考えが反映されている。つまり、子どもが「書くこと」も大事であるが、同時に親が「書くこと」も、親にとって子どもを見る目を考えることともなり、「理解を深める」ことになる、という構造である。子どもを育てる上では日記指導や学級だより、学校文集の取り組み、教職員集団の形成においては教育実践記録や学級だより、学校文集、「親・地域」との結びつきにおいては学級文集や学校文集・母親文集・地域文集などが、子ども・教師・親それぞれにとっての「書くこと」となっており、それぞれが自分の考えを「書くこと」によって理解を深め、そうしてできた作品をもとに話し合うことが、お互いの理解にもつながり、どういう子どもを育てていきたいか、どういう教育活動を展開していくか、に結びついていったのではないだろうか。

—— おわりに

以上、本論文では、学校づくり実践における「子ども理解」の位置づけについて、とりわけ学校・家庭・地域の連携において、どのような特徴がみられるのか明らかにすることを課題とし、佐古田好一の1950年代の学校づくり論及び教育実践に着目して検討を行ってきた。以上の検討を通じて確認したことを整理すると、次のようになる。

第一に、佐古田の学校づくり論では、子ども・親・地域を知ることが学校づくりの土台となっており、そうしてつかんだ「実態」をもとに学校づくりを進めていく、という構造となっていた。第二に、50年代の佐古田の実践では、子ども・親・地域を知るために、親・地域との連携の活動が取り組まれており、これらの活動では「子どもの作品」が中心に置かれていた。また、親による文集・学習活動、地域における教師同士のサークル活動、地域の教育研究会活動においても、自分たちの生活や考えを書き、調べ、それをもとに話し合う、という活動形態がとられていた。第三に、佐古田の学校づくり論や実践における教師・親・地域の連携は、子どもの実態を把握するという点から、そして、子どもを育てる上での「共通の願い」を持つという点から、必要不可欠のものとされていた。さらに、連携においては、「子どもの作品」、そして、教師・親が「書くこと」と「読み合うこと」が重要な役割を果たしていた。

佐古田の事例から示唆されるのは、教職員・親が、「子どもの作品」を通して自分達も書き、話し、読み合うことによって、「子ども理解」を育て、深めていったという点の重要性である。教育関係者が「子ども理解」をそれぞれの立場で行うだけでなく、そうして集められた「子ども理解」をお互いに「育て合い」、学校・家庭の教育活動につなげていく、そうしたサイクルがあったように見受けられるのである。さらに、「子ども理解」を通じて、子ども・地域の生活を見つめなおす活動は、子どもだけでなく、自分達が生きている社会を

とらえなおし、その中でどういった教育が必要かを考える契機ともなったのではないかと考えられる。

《注》

- 1) 本稿での「子ども理解」は、「その人がとらえた子どもの姿」という意味合いで用いることとする。なお、「子ども理解」をどのような意味合いで用いるか、あるいは「子ども理解」とは何か、という点に関わっては多くの研究が存在しているが、大きく分けると次の四点に整理できる。①表出した子どもの姿をどのようにとらえるのか・解釈するのかという意味での「子ども理解」、②教育関係者が子ども理解(①の意味)をする上で考慮すべき観点を示すものとしての「子ども理解」、③それぞれの教育関係者がとらえた「子ども理解」(=①の意味)を共有・交流することで「子ども理解」(=①の意味)を深めるという意味での「子ども理解」、④子どもを理解する上での基本的・あるいは専門的事項(発達段階等)について理解するという意味での「子ども理解」、である。以上の「子ども理解」のより詳細な分析については、他稿を期したい。なお、本研究は、「子ども理解」を①～④のすべてを含めた「子ども理解の段階と枠組み」として学校経営に位置づける必要性を検討しようとするものでもある。その試論として、富樫千紘「子ども理解と教師・保護者の連携—和光鶴川幼稚園における通信の取り組みから—」(和光大学現代人間学部心理教育学科保育実習センター『保育実習センター通信』第11号(2020年度)、2021年3月発行)に「子ども理解の段階と枠組み」の整理を行っている。参照されたい。
- 2) 富樫千紘「戦後日本における「学校づくり」概念の価値と「学校づくり」研究の展望」『生活教育』No.852、2019。
- 3) 1950年代の個別学校づくり実践については、富樫千紘「戦後日本における「学校づくり」概念の生成過程に関する研究:1950年代における後藤敏夫の教育実践に着目して」(『中部教育学会紀要』(14)、2014年)、富樫千紘「1950年代の「学校づくり」実践における「子ども理解」の位置づけ:岐阜県田武儀郡中有知小学校における学校と家庭の連携の取り組みに着目して」(『和光大学現代人間学部紀要』(14)、2021年)、等を参照のこと。
- 4) なお、(1)は、「学校経営論」「校長の責務」だけではとらえられない「学校づくりの核心にふれたものを探っていきたい」という本。師井の「校長日記」を引きながら、そこから佐古田が学んだこと・考えたことを記述するというスタイルの本である。
- 5) 佐古田好一・師井恒男『学校経営99の相談』(明治図書、1957年)17頁。
- 6) 佐古田好一「農村の学校での一つの実践」(遠藤五郎・勝田守一・国分一太郎・滑川道夫・柳内達雄『新しい学校づくり』牧書店、1958年)91頁。
- 7) 佐古田好一「親と手をつなぐ学校経営」(遠藤五郎・勝田守一・国分一太郎・滑川道夫・柳内達雄『新しい学校づくり』牧書店、1958年)244-245頁。
- 8) 前掲、佐古田・師井、20頁。
- 9) たとえば、「私の学んだこと」(志波末吉・佐古田好一・後藤敏夫・師井恒男・前原忠吉『現場の校長学』明治図書、1957年)86-87頁。
- 10) 佐古田好一『父母と教師を結ぶもの』新評論、1960年、99-100頁。
- 11) 前掲、「親と手をつなぐ学校経営」、244-245頁。
- 12) 前掲、『父母と教師を結ぶもの』、100頁。
- 13) 伊田半治「部落PTA」(佐古田好一編『親と教師を結ぶもの』新評論、1955年)154-155頁。
- 14) 佐古田好一『作文の教室』百合出版、1954年、165頁。
- 15) 同上、165-166頁。

- 16) 前掲、「親と手をつなぐ学校経営」、248 頁。
- 17) 大江町立有路小学校『桑の実のお母さん』第7号、1955年1月発行、59頁。
- 18) 同上、62-63頁。
- 19) 佐古田好一「教師と親たち」『児童問題講座 第三巻 学校篇』新評論社、1954年、221-222頁。
- 20) 佐古田好一『母親教室二十一夜』新評論社、1959年、228頁。
- 21) 前掲、「親と手をつなぐ学校経営」、246頁。
- 22) 同上、247頁。
- 23) 同上、247頁。
- 24) 前掲、『母親教室二十一夜』、229頁。
- 25) 同上、231頁。
- 26) 前掲、「親と手をつなぐ学校経営」、247頁。
- 27) 伊藤隆司「生活綴方と教育——九五〇年代における京都府大江地方の文集活動」西川裕子・杉本星子編『戦後の生活記録にまなぶ』2009年、日本図書センター、153-154頁。
- 28) 「福天作文の会のあゆみ」福天作文の会『こくばん』第9号（1953年3月10日発行）36-37頁。
- 29) 大江町教育研究会の前身となった河守地方教育振興協議会は、町内小・中・高校教職員全員を会員として1950年に結成されている。1953年1月に大江町教育研究会に改められた。改められた際の組織には、常任委員会（各校選出委員）、企画委員会（常任委員及び各部代表）、各教科及び教科外活動専門部が設置されていた（大江町誌編纂委員会『大江町誌 通史編 下巻』ぎょうせい、1984年、722頁）。
- 30) 佐古田好一編『親と教師を結ぶもの』新評論社、1955年、219頁。
- 31) 佐古田好一「校門をいでて」（国分一太郎・丸岡秀子編『教師生活』新評論社、1953年）223頁。
- 32) 前掲、伊藤、157頁。
- 33) 前掲、『父母と教師を結ぶもの』、199頁。
- 34) 前掲、『作文の教室』、139-140頁。
- 35) 前掲、『父母と教師を結ぶもの』、199-200頁。
- 36) 佐古田好一「教員室の士気を阻むもの」『児童心理』1959年4月号、34頁。
- 37) 前掲、佐古田・師井、101-103頁。
- 38) 同上、19頁。
- 39) 同上、122-123頁。
- 40) 同上、20頁。
- 41) 同上、125-126頁。
- 42) 同上、164頁。
- 43) 同上、86頁。
- 44) 同上、160-162頁。
- 45) 佐古田好一「母と子のしあわせのために」『子どもを伸ばす生活綴方』1957年、224-225頁。
- 46) 同上、228頁。
- 47) 同上、264頁。